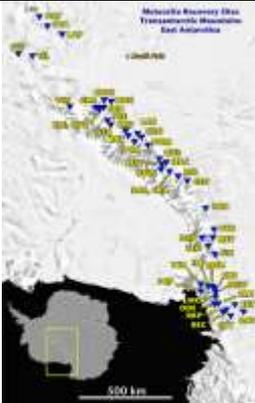


ANSMET (2023-08-05 updated)

名称	Antarctic Search for Meteorites
国籍及び場所	南極
開発機関	NASA
運用機関	NASA、現在はNASAの地球近傍物体観測プログラムから資金提供
施設環境	<input type="checkbox"/> 閉鎖系居住・ <input checked="" type="checkbox"/> 隔離
テスト可能な危険状態	<input type="checkbox"/> 船外活動・ <input checked="" type="checkbox"/> 隔離 (Isolation/Confinement) ・ <input type="checkbox"/> 過酷な環境 (Hostile/Closed Environment) ・ <input type="checkbox"/> 通信遅延 ・ <input type="checkbox"/> 明暗周期 ・ <input type="checkbox"/> 宇宙放射線 ・ <input type="checkbox"/> 地球からの距離 ・ <input type="checkbox"/> 重力 ・ <input type="checkbox"/> 月/火星類似地形
施設概要 (開発年、規模、特徴等)	 <p>ANSMET という施設が存在するわけではなく、南極という先住民不在の地域に存在する隕石を探索するプログラム。NASA、全米科学財団 (NSF) と ANSMET、およびスミソニアン協会 (SI) の間の協力的な取り組み。NSF は、この過酷な環境での隕石探索で数十年の経験を持ち、フィールド調査と収集のためのサポートを提供。NASA とスミソニアン協会は月のサンプルと地質標本の収集整理の専門家であり、南極隕石の分類、保管、分布作業を提供。2016年時点で、収集した隕石は2万2千以上。隕石探索は視覚的に実施。隕石研究者を中心とした4~10人の探索チームが、5~7週間氷原に滞在。30m 間隔で配置されたスノーモービルを使い、氷をスキャンして隕石を探す。最終的には、ANSMET が収集したすべてのサンプルは、スミソニアン博物館に移管され、恒久的に保管。なお、探索隊に宇宙飛行士が参加する場合もある。</p>
研究内容	南極から隕石標本を回収する米国主導のフィールドベースの科学プロジェクト。1969年に日本隊がヤマト山脈にて多くの隕石を発見、これに触発されて欧米で隕石探索が活発化した。
施設関連画像 (2019-2020フィールドシーズン) 研究者はマクマード南極基地で準備と訓練を実施後、空輸にて調査地点に到着	    
実施されたプログラム/ミッション	<ul style="list-style-type: none"> ・1977-78年フィールドシーズンを初めとして毎年実施。 ・2004年~2005年、12人のメンバー、1,230個の隕石を採集。130キログラム以上のパラサイト隕石が含まれ、そのうちの1つは、南極で30キログラム (66ポンド) を超える最大のもの。 ・2006~2007年、グロブナー山脈を探索した9人の組織的なチーム (宇宙飛行士ドンペティットを含む) と、将来の遠征の目的地としてスコット氷河とリーディ氷河を探索した4人の偵察チームで構成。 ・2009~2010年、8人のメンバーで構成、1010個の隕石採集。 ・2010~2011年、9人の体系的なチームと4人の偵察チーム (宇宙飛行士Serena Aunon-Chancellorを含む) で構成され、将来の可能性のある新しい領域を探索。1200以上の隕石を採集。 ・2011~2012年、大雪に見舞われたにもかかわらず、302個の隕石を収集。 ・2012~2020まで毎年探索実施、2020-2023パンデミックで中止 ・現在2023-2024シーズン デイビス・ワード氷原活動中
参照資料	https://en.wikipedia.org/wiki/ANSMET https://caslabs.case.edu/ansmet/category/19-20/ https://curator.jsc.nasa.gov/antmet/amn/amn.cfm#pre1994

